
女友達

早川由香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女友達

【Nコード】

N9761H

【作者名】

早川由香

【あらすじ】

沙希、美紀、奈津子は同じ大学の同級生。真面目な沙希、気の弱い美紀、クールな奈津子の学園生活をそれぞれの目線から描いた小説。

沙希の章（前書き）

読んでくださると嬉しいです。感想もお待ちしております。

沙希の章

> 沙希の章<

部活のテニスを終え、疲れた体を引きずって家に急ぐ。大学の部活とはいえ、練習はハードで、上下関係も厳しいが体を動かすのは嫌いではないし同級生も多いので楽しかった。ジャージにビーチサンダル、テニスバックのまま電車に揺られること2時間。家に付く頃には外はすっかり暗くなっていた。

「ただいま。」

「お帰り。御飯できてるよ。」

テレビを点ける。この時間は確か音楽番組があつたはず。御飯を食べながらテレビから流れる流行のポップスに耳を傾ける。大学生になつても最新の音楽情報を入手する癖は抜けずチェックしてしまう。カラオケで最新曲を歌えるのは沙希くらいのものだ。そういえば、大学生になると皆どうして最新曲を追い求めなくなるのだろう、と沙希は不思議に思う。高校生の頃は乗り遅れないように競うようにして最新曲を覚えていたのに。

風呂に入って、毎週欠かさず見ているドラマを見て早めに寝る。大学の授業の後はクラブやバイトがほぼ毎日入る。7時まで予定が入るとさすがに疲れる。大学生にしては珍しく11時には布団に入る。

「おはよ。」

「今日も講義、長いからしんどいね。」と、奈津子。

「途中で抜けてケーキでも食べに行こうよ!」と、美紀。

「行く行く。」と、奈津子。

沙希の左隣でアイラインを真剣に引いている女の子が奈津子、右隣の眠たそうにしている女の子が美紀。沙希、奈津子、美紀、大学にいる間ほぼこの三人は一緒にいる。講義を横一列に並んで受け、昼食と一緒に食べ、ダラダラお喋りする。三人一組のグループだ。三人共、マイペースのためグループというほど結束力は固くないが。

二限目が始まって10分後、座っているのに飽きたのか奈津子が、「出席取ったし抜けない？」

小声でさぼりの計画を立てる。

「ノート取るからこの時間は止めとく。ノート取っとくから二人で行って来てくれていいよ。」と、沙希。

「そんなの悪いよ。私もノート取るから一限はやめとく。」と、美紀。

気を遣ってくれてるのかな。

「そっか。じゃあ暇だし散歩でも行ってくる。」

微笑みながら奈津子が教室をさりげなく出る。

「ノート、面倒だね。プリントで欲しいよ。」と、美紀の愚痴がぼそつと聞こえる。

「三限目はプリントくれる先生だよ。」

「マジ？ラッキー。じゃ私もお茶でもしに行こうかな。」

「いいね、プリントもらって抜けよっか。」

プリント貰えるなら、まあいいっか。真面目すぎて付き合いが悪いと思われたくないし。沙希のノートはテスト前、二人に重宝される他にすることもないので授業に出てノートを取ることくらい苦痛でも何でもない。しかし、沙希だけに授業を受けさせることを美紀は気にしているらしく教室で美紀もノートを取ったりウトウトしたり本を読んでいる。奈津子はお構いなしに出て行くが。

そういう訳で、三限を抜けることにして長い昼休みにした。大学は午前中三限、午後三限の六限までである。大体、午前中は教室で講

義、午後は実験や実習が多い。

「昨日のドラマ見た？」と沙希。

「うん、連ドラ毎週見るの面倒だし。」

「それぞれ。毎週欠かさず見るのしんどいよね。最近ずっとニュース見てるかも。」

「うん、ニュースだね。テレビ付けても即、ニュースに変える感じ。」

と、奈津子と美紀。ニュースに興味の無い沙希は政治や経済の話になると付いていけなくなる。

「二人共、偉いね。ニュース見ないなあ。それより聞いて！。。が超かっこいいの！」

と、沙希がドラマの内容を面白おかしく語りだす。二人は沙希の話に耳を傾ける。沙希は話し上手で、興味のないドラマの内容でも聞いていて飽きない。1時間もあるドラマを沙希は5分で面白くまとめてくれるのでテレビを見るよりも沙希から話を聞くことの方が二人は気に入っている。

奈津子と美紀の芸能情報は主に沙希からと言っても過言ではない。ドラマだけでなく新人や新曲等の芸能情報についての知識はまず沙希から入手する。

「そつえば、皆、大学院行くの？」

研究者に憧れる沙希は大学院に行く予定だ。将来は大学に残って研究を続けて生きたい。

「行かないかな。研究したいテーマとかないし。」と、奈津子。

「製薬会社にでも就職して働こうかな。」と、続ける。

授業態度は不真面目極まりないが実習や実験は奈津子は得意だった。もともと器用なので失敗もなくソツなくこなし、とつとノルマを終わらせ誰よりも先に帰っていく。将来は男に貢がせながらキヤリアウーマンとしてバリバリ働く様子が目に浮かぶ。まさしく『デキル女』である。他人に合わせることない我が道を行く姿勢は誤

解されやすいが格好いい。ただ、化粧はもう少し薄めでもいいのではないだろうか。

「美紀ちゃんは？」

「私?! 誰に聞いているの?! 行くわけないじゃん! 早くこんなトコ、さよならして結婚して専業主婦として生きていくの! ていうか、何で薬学部になんか来ちゃったのか自分でも謎。文型タイプなのに。」

「

美紀がつまらなさそうに言う。もともと不器用な彼女は実験でも失敗を繰り返し、この薬学部にとくに愛想を尽かしている。不器用な彼女が実習中、有り得ない大失敗をして不貞腐れている姿は有名だ。もともと、おっとりしている彼女に実験、実習ばかりの薬学部は似つかわしくないように沙希は思う。彼女はとくに薬学部に背を向け、もっぱらピアノや料理、華道等の花嫁修業に精を出している。その情熱を少し大学にも注げばいいのに。今付き合っている彼氏とおそらく結婚するのである。大学に入るとすぐに同級生の彼氏をちゃっかりゲットして羨ましい限りだ。

「そういえば、なっちゃんは結婚しないの? 今の彼と長くない?」

と、美紀。奈津子には一回り、いや二回りだろうか年上の彼氏がいる。彼女から詳しいことを聞いたことがないのではつきりしたことは分らないが、どこかの会社の社長でお小遣いも貰っているらしい。新作が出るたびに彼女のバッグが変わることが何よりの証拠であろう。羨ましいというより、すごい。「パパ」と呼ばれる存在がいることは噂で聞いていたがまさか自分の身近な友達に「パパ」がいるとは思っていなかった。沙希には絶対に真似できない。以前、奈津子が水商売をしている時期があったがその時のお客さんかな、と推測するが本人に確かめられずにいる。

「別に結婚してもいいけど。。。働く方が楽しいかも。あゝあ。本気の恋は中高で終わりだったなあ。」

と、ため息をつきながら奈津子。

「沙希は大学院に行くの？」

「うん、行くつもり。」

と、沙希。

「あゝ分かる！沙希、真面目だもんね。研究とか得意そう！」

「うんうん、似合ってる！将来は女教授？！」

と、二人。

「そいえば沙希は今いい人いないの？前、紹介してもらったと言
ってなかった？」

来た！恋話！ 美紀が投げ込んだ恋話に身構える。

「実はまだ会ってないんだよね。メールしかしてないよ。」

「えゝ何で！」

「会わなきゃ分からないじゃん！」

二人から同時に非難の声が…。

「メールの絵文字が何か腹立って…。」と、沙希。

「えっ！絵文字？！何それ？！絵文字とかただの記号じゃん！」

「絵文字とか気にしたことないよ！」

「ていうか腹立つ絵文字とかあつたっけ？！」

「絵文字を言い訳にするかな。無理があるよ」

またまた二人から呆れた声と笑い声が。

「本当は会うつつもりないんでしょ！恥ずかしいとか？」

と、美紀。

「そんなことはないけど…。会ってもいいけど…。クラブとか忙し
い…。好みじゃないかもしれないし…。」

小声でもじもじ答える。

「どんな人がいいの？」

と、聞かれて少し考える。

できたらスポーツ万能で、真面目で男友達が多く、顔も並以上そん
な期待を抱く。そんな人いる訳もないし、いても振り向いてくれる
とは思わないが。

「アイドルみたいな人、現実にはいないんだからね！」

沙希の考えを覗いていたかのように奈津子から厳しいお言葉が。クラブも楽しいし、友達も多く大学生活は充実している。敢えて今の生活に彼氏が必要とは思わない。彼氏がいないとやっていけない！という美紀の気持ちは未だに理解不可能である。

「頑張ります…。」

小声で答えこの場を濁す。

「そういえば、見たよ！昨日ジャージとビーサンで帰ってなかった？女失格だよ。」

と、美紀。

「えっ、それで電車乗ったの？有り得ないよ。それが許されるのは高校生までだよ。」

呆れながら奈津子。

「花の女子大生が何やってんだか。」

ククッと美紀に笑われる。

「面倒くさいし、お洒落ジャージとビーサンだったから…。」

全く余計なお世話だ。普段からお洒落な二人には有り得ないだろうな、と思いながら小声で言い訳する。奈津子は出来る女スタイル、美紀はお嬢様スタイルと、毎日気合が入っている。それに比べて沙希といえばジーンズ、ジャージの毎日…。だから彼氏ができないのだろうか。このまま一生、彼氏ができなかつたらどうしよう、そんな辛い想像が頭によぎる。でも、告白も二回くらいされたことあるし大丈夫よね、と自分を励ます。とりあえずジャージ下校を自重しようかな…。

「沙希、面白いし、話しやすいし沙希さえ受け入れ態勢だったらすぐ彼氏できると思うけどなあ。」

「うん、もったいないよ。沙希いい子だし。一緒にいると楽しいし。」

「もう少し色気があればね。」

二人からフォロー(?)が入る。

「大学院で新しい出会いもあると思うしそれに期待だね！」
と奈津子が締める。

二人共、結構毒舌だが三人でいると笑い話になるので楽しい時間になる。

沙希は三人の中で自分が一番大学生として正しい生活を送っているように感じる。授業もさぼったことがなく成績も常にトップクラスの沙希から見ると、二人はクラブもしていないし、授業態度も真面目とは言えない。奈津子に至っては隙あらば、さぼろうとするし美紀は美紀で薬学部にそつばを向いている。いわば不真面目代表のよくなものだ。もっとも二人共、要領はいいので成績は平均よりも上なのだが。

二人はクラブもせず、授業が終わると同級生と馴れ合うこともなくさっさと帰ってしまうので同級生との交流は深くなく、やる気のない二人は異質な者とみなされている。反対に沙希はクラブの仲間と青春の汗を流し、放課後も残って勉強することも多いので自然と他の同級生と話す機会も多くなり交友関係は広い。周りに愛想を振りまくこともなく積極的には交わろうとしない姿勢は潔いが沙希にとってはさっぱりし過ぎているようにも感じる。

しかし、模範的大学生である沙希と共通する点がほとんどなく个性的な二人だが意外にもウマが合う。毒舌と言っても言い過ぎることはなく、三人共争いを避ける性格のためだろうか意見をぶつけ合うこともない。高校生の頃と違って自分とは異なる相手を認めることができるようになった。

変わった友人ができたなと思いつつ、三人でのたわいも無い生活が沙希は気に入っている。

美紀の章

> 美紀の章<

何でこうなるの、半分泣きそうになりながら時計を見ると6時だった。ほとんどの同級生は終了時刻の5時までには自分の実験を終えて帰って行ったので実験室には美紀を含め不器用な生徒が数人残っているだけだ。興味もなく意味もあまり分かっていない実験、それに加え失敗。もう嫌――！これは罰ゲームか何かかしら。

「畑中さん、もう終わりかけじゃん。俺、まだまだかかりそう。」
隣の谷口がしよげ返っている美紀に声を掛ける。

「疲れたね。不器用ってこういうとき困るよね。」

「分かる分かる。俺、研究職につきたいから本気で困る。」
笑いながら谷口が言う。その口調は拗ねた様子もなく明るかった。不器用でも研究者になりたいだなんて思うんだ、と美紀は意外に感じた。やはり興味を持ってないことに問題があるのだろうか、と自分と谷口を重ね合わせる。

7時になってようやく解放された。実験なんて大嫌い。白衣は燃えるわ、ビーカーは割れるわ、ナイフで手を切るわ、悪いことづくめだよ、と今までの散々な大失敗を思い返す。我ながら情けない。

「お疲れ、頑張ったね。美味しいパスタでも食べに行こう。」

おそらく2時間程、待っていてくれたのだろう。健が校門脇に車を止めて美紀を迎え入れた。

「もう嫌々。疲れた。」

「ハイハイ、辛かったことは忘れようね。なっちゃんが美紀の不貞腐れた顔見て笑ってたよ。」

「なっちゃんも、健も器用だもんね。私の気持ちなんか分からない

よ。」

「たまたま早くできただけだつて。」

頭を撫でられる。優しい彼氏がいてくれてほっとする時はこういう時だ。一人だったらきつと泣いて帰っていただろう。

「美紀は働かなくていいのだから頑張らなくていいよ。俺が養ってあげる。」

本当かどうか分からない言葉だが嬉しくてつい機嫌が良くなってしまふ。健のお嫁さんになるために花嫁修業は頑張るね、と思う一方、また彼氏に依存してしまう自分が嫌になる。

「おはよう。眠いよ。」

「私も昨日のクラブで体が重いよ。筋肉痛？」

と、沙希。

「お疲れ。また筋トレ？すごいねー。運動なんてここ一、二年ちゃんとやってないよ。」

「やばいよ、それ。早死にするよ？」

と、マスカラを塗りながら奈津子。

「なっちゃんもクラブしてないじゃん。」

「ジム行ってるもん。ジム行ったら？楽しいよ、痩せるし。」

運動は汗かくから嫌いなんだよね、と言いながら席に着く。早死には避けたいけど。

バッチリ化粧ですっかり変身した奈津子と教室を出る。

「沙希、真面目だね。」

「ホント、ホント。ていうか、私達が不真面目なだけだよ。」

「アハハ、確かに。」

「なっちゃん、どこ行くの？」

「図書館でテストの勉強する。教室うるさいし。授業聞いてないから意味ないしね。」

もうすぐ大きなテストがある。これはペーパーテストなので手先の器用さは関係ない。

奈津子と別れて美紀は教科書を買いに本屋へ向かう。授業を聞いていないのでテスト前必死で勉強するしかない。テスト前に授業の内容を自分でまとめて必死で暗記する二人のような不真面目な輩を真面目な同級生達は気にいらないうだ。彼らは授業を毎回真剣に聞いているのでテスト前も焦らないですむらしい。もちろん成績も上位者揃いだ。特に彼らと接触した覚えはないのに鼻白まれているのは正直、気分が良いものではないが。

もちろん、美紀と奈津子だけが不真面目な訳ではない。美紀の学年では真面目組、不真面目組が半々くらいいる。しかし、不真面目組の中でも二人はペーパーテストの成績は良く追試にかかるようなヘマはしたことがなかった。

真面目な沙希も、私達二人といるのが嫌なのかな。そんなことが頭に浮かぶ。奈津子に相談しても「嫌なら離れていくでしょ。」と、クールに流されそうである。テスト前は沙希のノートやプリントの書き込みを図々しく頼ってくる二人を沙希が疎ましく思っている。不思議ではない。沙希が嫌そうな素振りを見せたこともないので余計に不安になってくる。ちよつとしたことが引つ掛かって気分が滅入ってしまうのが美紀の性分だ。出来るだけ教室にはいようと、と思いながら教室へ戻った。

お昼は三人一緒だ。

「今度のクラスの飲み会行く？」

「そういえば、そんなのあったね。来週だけ？」

「私、健も出るから出席するって返事したよ。」

「美紀ちゃん行くの？じゃあ行こつかな。」

「私、その日バイト入ってる…。」と、沙希。

「さばっちゃえ！」と、奈津子。

「無理無理。行きたかったのにな。」

「えー、沙希ちゃんも来てよ！」

いきなり後ろから今回の飲み会の幹事でもある和田が入ってきた。
お調子者でクラスのムードメーカー的存在だ。もちろん不真面目組である。不真面目組の彼が幹事をしたため真面目組のメンツが少な
いらしく人数集めに奔走しているようだ。

「意外に人、集まらないから呼びかけてるところ。」

「あの辺、来なさそうだもんね。」

と、真面目組の方を見ながら奈津子が。

「うん、来たらいいのに。たまには交流を深めたいからクラス会に
したのにさ。」

和田が口を尖らせながら言う。

「じゃ、二人参加ね。ありがと。」

和田の仲間の賑やかな連中が飲み会のメンバーの大半であろう。盛
り上がる飲み会になりそうだ。

「盛り上がりそうだね。」

と、嬉しそうに奈津子。

「うん、盛り上がり過ぎそうだよ…。」

飲み会当日。健と一緒に安っぽい居酒屋に入る。健の隣に座るのも
なんだか気恥ずかしいので奈津子の隣に座る。健はいつの間にか美
紀の正面に健の仲間と一緒に座る。和田の「乾杯！」で宴会が始ま
った。ビールを飲もうとすると健にサツと取り上げられる。

「美紀は酒弱いから飲んじゃダメ！」

酒は嫌いだし付き合い程度に飲もうと思っていただけで素直に
グラスを置く。それを見ていた和田にすかさず冷やかされる。

「おっと、早速いちゃついちゃうの?! っていうか、畑中さんって旦那探
しに大学来たってマジ?」

と美紀に聞く。

「そうだよ。薬学部向いてないから目標をお嬢さん探しに変えた
の!」

笑い声が聞こえる。

「でも、離婚されたら生きていけないから薬剤師の資格だけでも頑張っけて取ります！」

おどけて言う。

「離婚なんかしないよな！」

と、和田が健をニヤニヤしながら見る。

「それはどうかな。」

健も冗談で返す。奈津子が楽しそうに、

「美紀ちゃんと健君、ホントに仲がいいよね。別れるとか考えられないよ。」

嬉しいことを言ってくれる。

「いや、ホント別れられたら生きていけないよ。3年前の失恋で振られる怖さが良く分かった。なっちゃん、振られたことかなさそうで羨ましいよ。」

「あゝ。美紀ちゃん、あの時やばかったね。鬱病になるんじゃないかって心配だったよ。彼氏とかすぐできるって。本気になれるかどうかは別だけど。」

「なっちゃん、モてるからそんなこと言えるのよ。今の人、本気じゃないの？年上だっけ。」

さりげなく、今まで聞いたことのない奈津子の恋愛事情を聞いてみる。

「そりゃあ嫌いじゃないけど、本気でもないなあ。向こうが二股してても何も感じないだろうし。こっちだって彼氏増やしたいし。」

悪戯っぽく笑う。美紀にとっては信じられない恋愛だ。沙希は言うまでもない。今まで付き合った相手は皆本気で好きだったし好きでいてくれた。美紀は二人に慣れすぎて一人になれない。依存してしまっている自分が情けない。一人になるのが嫌で自ら別れを切り出したこともないので、振られた時のダメージは大きかった。それを奈津子に話しても分かってもらえないし、軽蔑されるのも怖いので言わない。クールに振舞える奈津子が羨ましい。本気になれない恋

愛は楽でいいな、と思う反面、寂しくないのかなとも思った。

気が付けば奈津子は横の派手目な男子と盛り上がっている。いや、むしろいちゃついているように見えるのは気のせいだろうか。

「なっちゃんて、キャバ嬢だったってマジ？」

藤田が奈津子に酔っ払っているのか大声で聞く。奈津子も酒が入っているせいでテンションが高い。普段は隠しているが、

「昔ね。もうしんどいからやめちゃったけど。」

と。ええっ?!あの噂は本当だったのね、と心の中で驚く。奈津子のドレス姿を想像する。確かに似合いそうだ。話も上手いし、色気たっぷりだし、客の指名も多かったのではないかと思う。

「じゃあ今の年上の彼氏って昔の客?金持ってたそうだな。」

「若い彼氏も欲しいな。」

面白そうな話題を嗅ぎつけて奈津子の周りに男子が集まる。調子に乗って奈津子も普段は語ろうともしない彼氏のことや昔のバイトのことを面白おかしく話している。奈津子、お酒大分飲んでるけど大丈夫かな、変なことにならなきゃいいけど。心配だがあのうるさい輪の中に入って行く気もおこらない。

一次会が終わり二次会へ流れる。美紀は門限があるので一次会で帰らなければいけない。奈津子と一緒に帰ろう、と声を掛けるが二次会に行く、と美紀をスルーして楽しそうに和田と話し続ける。健も一緒に一次会で抜け、駅まで送ってもらう。奈津子が気になるがしょうがない。

「なっちゃんをちゃんと家に帰してよね。」

和田を睨みながら皆と別れる。

「昨日大丈夫だった?ちゃんと家に帰った?」

「帰った帰った。うゝ飲みすぎて頭痛いよ……。」

奈津子が苦しそうにトイレへ向かう。その間に怪訝な顔の沙希に昨日のことを説明する。

「大分、ぶつちゃけちゃったみたいだね、なっちゃん。私達でも普段滅多にそんな話しないのに。」

「二次会、女の子少ないのに行っちゃうし、心配してたんだけどちゃんと家に帰ったみたいでよかった。」

「なっちゃんって謎が多いよね。そこがなっちゃんっぽいけど。」

「あんまり自分のこと話さないよね。」

「うん、昨日大分、飲んだからね。珍しく饒舌だったよ。」

「うわっ、なっちゃんの詳しい話、興味あるけど何か怖いなあ。あまりにも私とかけ離れてて…。聞いてる分は面白いけどね。」

「沙希には理解しがたいと思うよ。」

「私もそう思う。あまり深く追求しないでおこつと。」

「悩み相談とかもされたことないよね。」

「そう言えば。ただ悩んでないだけかもしれないけど。」

二人で笑う。楽観的で好奇心旺盛な奈津子が美紀、沙希にとって羨ましく見える時がある。向こう見ずな行動は心配ではあるが。彼女は人の目等、気にせず我が道を歩いていく。見習いたい部分もあるが、ほとんど真似できない。普通の女子大生の日常とかけ離れた奈津子のことを、とやかく言う連中もいるが美紀と沙希は奈津子のことが好きだ。

少し変わった友人であるが、二人に出会えたことと健の彼女になれたことが、薬学部に入った唯一のメリットだと美紀は思った。

奈津子の章

> 奈津子の章<

目を覚ます。もつと寝ていようかな、と迷ったがここが彼氏の家だと思い出す。そろそろ帰る、と言い掛けて博明の方を見る。

「ちょっと！何見てるのよ！」

博明の手から携帯をひったくる。やばい、どこまで見られた？眠気がスーッと覚める。博明は何も言わない。気まずい沈黙を背に服を着る。

「…この男誰？」

どの男？とは聞けない。

「ただの知り合いよ。」

「知り合いとデートするの？」

「ちよつと会っただけよ。」

「何回も会ってるみたいけど。」

どこまで見た？とも聞けない。

「うるさいなあ、勝手に人の携帯見ないでよ。」

やけ気味に答える。

「何で？俺、奈津子の為に色々してきたよね。ずっと一緒にいたし。」

誰と一緒にいてくれと頼んだ？

「…今日は帰るね。」

彼の家族への挨拶もそこに逃げるようにして外に出る。面倒なことになった。言い訳するのも面倒くさい。どうしたものか。博明にもう愛情はない。浮気相手の藤森にも無いが。もうどちらが浮気相手なのか本命なのかも分からない。休みの日は「どこかへ行こう」、テスト前は「勉強手伝うよ」、バイト帰りは「食事へ行こう」、挙げ句の果てに「結婚資金の貯金を始めよう」ときた。私はそんな

に暇ではない。もううんざりだ。別れよう。

別れ話をするのも疲れるし、どうしよう、昨日のことを思いあぐねながら家を出た途端、博明の姿が奈津子の目に入った。まさか待ち伏せしていたとは。

どちらから何も切り出さない。気まずい沈黙のまま駅へ向かう。

「…何も言ってくれないんだね。俺、許すよ。もう他の男と会わないって約束して。」

「…うん。もう別れよう。」

「何で？俺は結婚もする気にいるんだよ。」

「もう、博明のこと昔みたいに思えなくなっちゃった。」
言葉を選びながら話す。どこまで付いてくるのだろう。

「何で？俺、もっと努力するから。」

「ごめん。」

駅に着く。

「俺、諦めないから。」

一人で電車に乗り込み、思わず大きなため息がでた。やはりすんなり別れられないか。

「別れました。ただけど。」

「誰と？」と、沙希。

「博明の方。」

「振ったの？」と美紀。なんだか楽しそうなのは気のせいだろうか。

「ていうか、何で？」二人からの質問攻めにあう。今日は朝から「何で？」をよく聞く一日だ。

「携帯見られた…。」

「あら…。色々バレたんじゃないの？」

「どこまで何がバレたか分からないから困ってるの。」

「もう別れちゃえばいいじゃん。」

「別れられないから困ってるの。」

「困ってることだらけだね。」沙希が笑って言う。

「別れ話がこじれて刺されないように気をつけてね。」

笑いながら美紀。何で二人共楽しそうなんだ？少し不満に思いつつ、つられて笑う。

「男女関係のもつれてやつ？気をつける。」

この頃は三人とも、よくあることだと、まだ楽観的でいられた。

バイトを終え家に帰る。もしやとは思ったが、やはり家の前に奴がいる。心の中でため息をつく。

「お帰り、遅かったね。何してたの？」

いつも通り学校に行っていましたよ。

「ごめん、もう博明の気持ちに答えられない。博明の気持ちが重たいの。」

「お願いだから考え直して。」

博明が泣きそうな声を出す。奈津子にとっても楽しかった思い出がなかった訳ではない。一瞬楽しかった日々が脳裏をよぎるが、気持ちを盛り立てる。

「何回会いに来てくれても無理だから。」

朝、出かける前に家の前にいる。夜、帰ってくると家の前にいる。

これが一週間続いた。さすがの奈津子も怖さと薄気味悪さを感じた。もちろん奈津子だってこの一週間、彼に会わないように色々対策を立てた。いつもより大分早めの時間に帰る、いつもより遅めの時間に家を出る、友人の家に泊まる。しかし、奈津子が姿を現さない度に携帯に電話、メールが入り、返事をしないでおくど実家のインターホンを鳴らされる。そうなると話をせざるをえない。家族にも男関係で揉めていることがバレて恥ずかしいやら情けないやら。奈津子の派手な交際に普段何も言わない母親からも、

「男の掛け持ちはやめなさい。気の毒でしょう。」

と注意される始末だ。こんな日がいつまで続くのか。別れ話がここ

まで難攻したのは初めてだ。他の男とはもつと冷めた関係で別れ話もあつさりしたものだった。思い通りにいかない。それに怖い。本当に危害を加えられたらどうしようと、柄にもなく不安になった。意を決して博明に電話をする。こちらから掛けるのは何日振りだろう。

「もうやめて。こんなことをされても困るよ。もう博明のこと好きになれないし、むしろ嫌いになりそう。」

正直に今の気持ちを言う。長い沈黙の後、

「…ごめん。困らせてるのは分かってたんだけど諦めきれなくて。もう別れよう。」

思ったよりあつさりと事がすすんで拍子抜けした。

「別れました。」

「やつと?! ずつとなつちゃんに会いに来てたんでしょ? 大丈夫だった?」

沙希が心配そうな顔で聞く。

「うん、たいへんだったけど分かってくれたみたい。」

「博明さん、可哀相に…。よっぽどなつちゃんのこと好きだったのだろうね。」

しみじみと美紀が言う。

「早く立ち直ってくれることを祈るよ。」

昼休み中、奈津子の携帯が鳴った。嫌な予感がする。

「俺、もう死ぬことにするよ。奈津子がいないとやっていけない。」

博明からだ。背筋に冷たい汗が流れる。

「今、どこにいるの?」

冷静を装って聞く。

「駅のトイレ。血が出る。今まで楽しかったよ、ありがとう。最後まで困らせてごめんな。」

「えっ、ちよっと、待って!」

電話が切れる。ただ事でない様子の奈津子を二人が怪訝な顔で見上げる。

「どうしたの？」

「博明が自殺したみたい、いや死んでないけど。どうしょ。」

頭が高速回転をする。色々な感情が出てくるが、整理をしている暇はない。今、自分がすべきことは彼を助けることだ。博明の実家に電話をかける。

「あら、奈津子ちゃん。博明がお世話を掛けてるみたいで。」

事情を知っているようで、機嫌の悪い声で彼の母親が出る。急いで事情を話す。大学から一時間半かけて最寄り駅に行くより断然彼の実家からの距離の方が近い。

奈津子の青い顔を見た美紀が奈津子を教室から皆に気づかれないうちに連れ出す。沙希もその後を追う。

「駅のトイレで手首？切ったみたい。今、彼の母親に見てもらおう頼んだ。」

ええっ、と二人同時に驚く。二人は奈津子があんなに慌てる様子を見るのが初めてだった。今まさに自殺を図ろうとしている人が身近にいるという経験も。

「生きてるって。きっと駅員さんも見つけてくれるよ。」

「うん、お母さんも探してくれてるし。最悪の事態にはならないよ。」

何て励ましたらいいのかわからない。二人の心中も穏やかではない。別れ話がこじれていることは知っていたが、まさかここまで事態が悪化していたとは思ってもいなかった。ましてや博明が自殺を試みるほどショックを受けているとは夢にも思っていなかった。

今、どんな状態なの？、何で自殺なんか…、何も死のうとしなくても、連絡はまだなの、不安の中に苛立ちが混ざる。

しばらくして奈津子の携帯が鳴る。

「おばさん？博明さん大丈夫ですか？」

「命に別状は無いわ。トイレで手首を血を流して倒れていたの。今

は病院に運んでもらいました。」

「よかった、安心しました。傷はひどいんですか？」

「傷も浅いみたいで意識もしっかりしてます。ただ、心の方が……。」

「あなたは学校にいて。病院に来なくて結構よ。」

そっけなく言い放たれて電話が切られた。彼の母親が怒るのも無理はないが、全てを奈津子のせいだとも言いたげな態度に少し腹が立った。しかし、博明が大事に至らなくて本当に良かった。自分のせいで人が死ぬのは心苦しい。

「……大丈夫だった？」

美紀が恐る恐る聞く。

「うん、たいした傷じゃないみたい。病院で手当を受けてるって生きててよかった。」

「良かった。安心したよ。」

「お見舞い行ってあげなきゃ。」

「うーん、おばさん、かなり私に対して怒ってるみたいだから行きづらいな。それに博明にも諦めてもらわなきゃいけないし。」

クールな奈津子が戻ってきた。

「いいの？一回くらい……。」

「メールだけにしておく。」

「でも、すごいよね。文字通り死ぬほどなっちゃんのこと愛してたんだね。」美紀がぼつりと言う。

博明が家の前にいない。当たり前か。今日は重い一日だったな、と思い返す。まさか博明が自殺を図ろうとするだなんて。そんなに私を愛していたとは。でも、これで私のことを諦められるだろう。見舞いにも行かない女のことなんか早く忘れてしまった方が良く、酷な言い方かもしれないがこれで博明と縁が切れて良かった。しかし、どれだけポジティブに考えてみても『自分のせいで人が死のうとした』この事実が奈津子を捕えて離さなかった。

死ぬほど誰かを好きになるなんて奈津子には考えられない。美紀もそんなタイプだな、とふと思いつく。心から誰かを愛す故、裏切られる度に心が折れる博明や美紀か、誰も愛さない故、振り回されることのない奈津子のどちらが幸せなのだろうか。そして私もいつか誰かを心の底から愛せる日が来るのだろうか。こんなことを考えていることが、博明の事件が奈津子の心に重く押し掛かっている証拠だ。いつもの私らしくない。無理に頭から今日の事件を追いつけようとする。

腹部に腫瘍が見つかったのは博明の事件から数週間後のことだった。お腹は張るし便秘だし調子が悪いとは思っていたがまさか腫瘍だとは。医者が言うには良性の腫瘍なので命の危険は無いが取り出すために手術が必要らしい。それにしても最近運がない。しかももうすぐテスト週間だというのに。二人にもまた心配と迷惑を掛けてしまうが報告しない訳には行かない。

「しばらく入院するから学校に行けないの。テストも全部追試で受けることにするよ。」

奈津子が軽い口調で話す。

「休んでいる間のノート、プリントは任せて！」

「良形で良かった。頑張っただけ。」

奈津子の明るい様子にほっとする。けれども、

「博明のことで罰が当たったのかな。」

独り言のように呟いた奈津子の顔が一瞬だが暗くなったのを二人は見逃さなかった。

これから病院だから、と言って休み時間に席を立つ。

「神田さん、今日もさぼり?！」

和田が大げさに聞く。

「病院行くから今日はさぼりじゃないよ。」

「妊娠でもした?!」

「バレた?」

笑いながら奈津子が教室から出て行く。

「なっちゃんと言うと冗談に聞こえないよね。」と、沙希。

「また変な噂が流れなかったらいいけど。」

沙希と美紀が小声で笑う。

「最近、なっちゃんついてないね。」

「博明さんのこと反省してるみたいだね。珍しく。」

「うん、私もびつくりした。あのなっちゃんが。」

「でも博明さん、可哀相だなんて思っちゃった。振られるの辛いのがかるし。しかも原因は恋人の浮気。そりゃあ、すごいショックだったと思うよ。私には自殺するような度胸ないけれど。」

美紀が言う。

「なっちゃんも自分が原因でまさか自殺するとは思ってもなかっただろうしね。」

「博明さんの一件が終わったと思いきや次は病気かあ。」

「なっちゃんも本当は辛いだろうね、心配。」

「私達の前では絶対弱音を吐かないから余計に心配だよな。」

入院先の病院が決まった。急な手術のため引き受けてくれる病院が少なく、結局新幹線で行かねばならない遠い病院に決まった。手術は失敗の可能性は限りなく低いものだが気持ちは重い。家族には心配を掛けたくない、仕事で忙しい藤森や友達には弱気であるところを見られたくないので誰にも辛い気持ちや吐露できず平気な顔で振舞った。手術の不安だけでなく、『自分のせいで人が死のうとした』という事実もまだ心に突き刺さったままだ。沙希と美紀も心の中ではそんな目で自分を見ているかもしれない。入院が長引いてこのまま留年してしまったらどうしよう。様々な不安がおしよせてくる。目頭が熱くなる。涙を急いで振り払う。

検査や準備で学校を休む日が増えた。沙希と美紀と、ろくに話もできないまま入院する前日の晩になった。明日大学では大切なテストがあるはずだ。本来ならば奈津子も今頃必死で勉強しているはずだ。追試で苦勞しそうだ、と思いながら入院の準備をする。

メールの着信音が鳴る。沙希からだ。

「忙しいときにごめん。外に出てくれる？」

午後8時。まさか、と思いつつ部屋着、スツピンのまま玄関を出る。二人がいた。何で？テスト前なのに。

「はい、これ。入院する時に着てね。後これも。」

美紀からパジャマと病氣平癒のお守りを渡される。

「二人共、テスト前じゃ……。」

「簡単にお見舞いにも行けないから今、来ちゃった。」

二人が笑いながら言う。いつもテスト前には必死な美紀と沙希だ。けれど、決して二人の家から近くない奈津子の家に来てくれた。

「たいへんだと思うけど頑張つて。手術、絶対成功するよ。」

「嫌なことがあった後は良いことがあるって言っし。」

二人が励ましてくれる。目頭が熱くなると同時に心の奥が温かくなるような感じを覚えた。このまま大声で泣いてしまおうか。

「ありがとう、実は珍しく落ち込んだの。だから二人が来てくれて本当に嬉しい。」

素直に気持ちを言葉に出せた。もし二人が同じ状況であつたら私も同じことをしていただろうか。いや、きつと励ましや心配はするだろうが大事なテスト前にわざわざ家まで見舞いに行くことはなかっただろう。まるで周囲に無関心の自分が恥ずかしく思えた。何かと派手な自分が周囲に受け入れてもらえるとは思っていなかったし二人もそうだろうと勝手に思っていた。辛いとき友達が傍にいてくれることでこんなにも心強く、また嬉しく感じるとは。誰かに、この二人にだけは嫌われたくないと思ったことも初めてだった。

入院当日。奈津子の足取りは軽かった。恥ずかしながら自分が窮地

に陥って初めて人の大切さを知った。入院ついでに自分の生き方を少しは反省しようと、これまた珍しく謙虚な気持ちになった。

三人の章

>三人の章<

もうすぐ卒業だ。

思えば私達三人はバラバラだった。クラブも研究室も進路も。卒業後の進路は沙希は大学院、美紀は病院、奈津子は製薬会社と異なる道を歩むことになった。学校にいる間の多くの時間を共に過ごしたが、配属や進路が三人が一緒になったことはなかったように思う。同級生の中には仲のよいグループでまとまって行動する子達も多かったが、三人は相談こそすれど、最終的には自分で決めた道を進んだ。わざとそうしているのかというぐらい三人の選ぶ道は違っていた。

「本当に被らないね。」と、いつも笑いながら話していた。馴れ合いを好まない三人にとって他人の意見に流されない自立した関係は居心地が良かった。それでいて自分の意見を他人に押し付けることもなく意地を張り合うこともなかった。この四年間三人でうまくやってこれたのだと思う。

こんなにも性格の違う二人と四年間けんかもせず毎日楽しく過ごせるとは知り合った当初は思わなかったなあ、二人に初めて会った時のことを思い出す。たまたま席が近かった。派手な化粧と服装で目を惹いた奈津子。見た感じお嬢様で不安そうに辺りを見回していた美紀。大人しそうな美紀はともかく、きつそうな奈津子とは気が合わないだろうと警戒していた。それが共に過ごすにつれ最初のイメージは変わっていった。付き合っていくうちに（毒舌なところはイメージ通りだったが）奈津子に悪意は無く場を盛り上げようとしているだけだと気づいた。意外だが美紀も奈津子に負けずと毒舌

だがお喋り好きで三人でいるといつも盛り上がり、心の底から笑えた。沙希は二人といて毎日本当に楽しかった。彼氏ができたら真っ先に二人に相談しよう。参考になるかどうかは微妙な二人だが学生時代と変わらず三人ならまた楽しい時を過ごせるだろう。

あーあ、早く結婚して優雅な主婦になりたいな、なんて薬剤師になってバリバリ働くぞという入学当初の志はどこへやら。この四年は楽しかったな。理想の高い沙希にはついに彼氏ができなかったな、なっちゃんはドラマみたいな恋愛してたな、思わず笑ってしまう。何気なかったが楽しかった会話が次々に思い出されて楽しい気持ちになると同時に涙がこぼれそうになる。本当に楽しい四年間だった。大学は大嫌いでも二人（と彼氏）がいたから四年も我慢して通えた。二人には感謝の気持ちでいっぱいだ。本当に共通点の少ない性格だったと思う。けれどそれが分かった上でお互いを認め合えたことが何より嬉しい。友達も捨てたもんじゃない。今まで彼氏に固執していた美紀にとって新しい発見だった。もう毎日二人に会えなくなるのか、寂しい。これから働き出しても会えるかな、二人から元気をもらえなくなるなんて、と弱気になってしまう。学生でいたいなあ。

濃い大学生活だった。彼氏が複数できたことも、死ぬほど愛されたことも、手術をしたことも何もかも予想外だった。一番は親友ができたことだが。マイペースすぎる奈津子は周囲に馴染むのが苦手だったが、馴れ馴れしい関係を求められず自分の思った通りに行動しても二人から非難されることもなかった。二人も、気の弱い美紀でさえ自分の意見は持っていた。そんな二人だから自分のことを受け入れてくれたのだろう。友達を作ろうという気はなかった、受け入れてもらおうとも。けれど知らず知らず二人に惹かれいつしか三

人でいたいと思うようになった。

二人と離れてしまうのか。卒業式には泣いてしまっだろうな、人前でまた泣いてしまう。卒業までに二人に素直に感謝の気持ちを述べる事ができれば、と思う。気持ち悪がられるだろうか、いや、きつと笑ってくれるだろう。

三人の章（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました。

小説を書くことの難しさを知りましたが書いてとても楽しかったです。

もしよろしければ、感想、評価を頂けると嬉しいです。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9761h/>

女友達

2010年10月21日21時47分発行